ムスリム女性にとってのヴェールの意味

～インドネシアのイスラーム社会を通して～

国際政策文化学科 3年 守矢優衣

共同研究者：瀧沢颯太・田坂椰弥・守田もも

西洋のフェミニズムには、イスラームは女性を抑圧している宗教であり、ムスリム女性が纏うヴェールはその象徴であると考える態度が見られる。そのような考え方は、イスラームの本当の姿なのだろうか。ヴェールは女性を抑圧しているのだろうか。インドネシアのイスラーム社会におけるヴェールの意義から、その真偽を探る。

本調査では、文献調査と現地調査の方法を用いた。インドネシアで行った現地調査では主に小学校、中学校、高校、大学を訪問し、学生たちにヴェールについて聞き取り調査を行った。そして得られた結果を年代ごとに、段階的に分析した。また、現地の政府の機関やNPO団体、企業でも聞き取り調査を行った。

調査の結果、ムスリム女性がヴェールを纏う動機や理由が明らかになった。小学生から大学生までの結果を段階的に分析すると、初期段階では家庭環境やイスラーム文化などの影響を受けて、習慣的にヴェールを着用する傾向にあったが、成長するにつれて、イスラームへの理解が深化し、また個人が様々な理由によりヴェールを纏うようになることが明らかになった。また、ムスリム女性それぞれでヴェールの着用の動機と理由は異なるが、彼女たちはヴェールの着用を強制的というよりも主体的に選択していることがわかった。

加えて、ヴェールの着用が他者を意識したものであるという社会的側面、それに魅力的に見られたいという女性的な側面が加わった、ファッション性が明らかになった。

インドネシアのイスラーム社会におけるヴェールの意義は一義的には解釈することができない多様なものであり、ヴェールが女性抑圧の象徴であるとは言い切れないだろう。

本調査でヴェールを事例にインドネシア社会を見ることで、イスラーム社会と西洋における価値観の違いが明らかになった。グローバル化に伴い、異文化交流が増えると予測される。その中で、限られた価値観だけで異文化を判断するのではなく、相手の文化や価値観に寄り添い、理解を深めることが必要不可欠なのではないか。そのような姿勢が、異文化への多面的、包括的理解に繋がり、差別や偏見をなくす第一歩になるだろう。この研究が、その一助となると考えている。

ペリタ小学校（SD Pelita）でのインタビューの様子
2017/08/31